『第二言語習得・教育の研究最前線2006年版』発行にあたって

佐々木　嘉則

今年も『言語文化と日本語教育』の 2006 年増刊特集号として『第二言語習得・教育の研究最前線』シリーズの五冊目をお届けする。今回は『言語文化と日本語教育』の発行主体である日本言語文化学研究会の会員からの3本の投稿論文に加え、研究方法論に関わる講義録とその「解説」を収録している[1]。

第 1 章「語彙の習得」には徳田恵氏(「読解における未知語の意味推測と語彙学習」)のレビューを収めた。狭義の語彙習得に関するレビューとしては谷内(2002, 2003)、吉澤(2004)に次ぐ四本目の本シリーズ収録であり、これらの成果を踏まえたうえで特に読解中の意味推測に焦点を絞って論じている。

第 2 章「談話の習得」は遠山千佳氏(「第二言語における談話の習得　–認知語用論的アプローチからの一考察–」)のレビューを収録している。遠山氏は前号掲載の「は」の習得のレビュー(遠山 2005)を受け、さらに視界を広げて認知言語学の観点から談話研究の成果を再整理することを試みたものである。

第 3 章「多言語社会における言語使用」はコードスイッチングに関する田崎敦子氏の論考(「コードスイッチング研究の概観：多言語社会のコミュニケーション分析に向けて」)を収めている。この投稿論文を審査していただいた匿名の査読者のお一人から次のようなコメントをいただいているので、当人のご許可を得てここにご紹介する。

> 「最初読み始めた際には、こんなに長くていいのかなあ、と思っていたのですが、読後の感想としては、…充実した論文にするには、これくらいの長さが適切であるし，こうした論文集が必要だとも思いました。読後、査読者自身がすっきりした気持ちになったことから考えて、この論文の構成と内容がしっかりしていたこと、指摘が適切だったことが要因だと思います。論文として長くても、内容がわかりやすく記述され、構成、論理の一貫性などがしっかりしていれば、この分野の学徒や研究者に貢献できる有意義なものに充分なりうることを、改めて痛感した次第です。」

今後とも、他の国内学術誌が紙幅の都合により掲載を躊躇しかねないような長編論文にも積極的に門戸を開くことを本シリーズの特徴の一つとしたいと思っている。その一方では、林(2002)のように対象領域を明確に限定してその範囲で的確な論点の整理を果たした短編の佳作も、投稿を大いに歓迎したい。

以上の三編に続き、補章「第二言語習得研究の方法論」には、向山陽子氏が修士論文研究の過程で得た様々な気づきを語ったプレゼンテーション(「リサーチクエスチョンを軸とした実験的習得研究の進め方：連体修飾節の教授効果研究を事例として」)を収録した。

あわせて、特に研究テーマ選びの途上で生じる諸問題に焦点をあてた拙稿(「研究テーマ選びにおける困難点」)を「解説」として付している。

なお、本号より英文による論文要旨の制限字数を大幅に緩め、1～2 ページ程度の長文の要旨を付することを可とした。今回収録の投稿論文のうち、田崎敦子氏がこれに応じてかなり長い要旨を寄せている。これは、本シリーズの既刊号に対する田中真理氏の書評中の「研究内容がある程度概観できるような充実した英文要旨を付けてもらいたかったと思う。」(田中 2003: 118)という提言におそまきながら応えようとしたものである。研究成果を英語で効果的に発表しないことには業績が国際的に認知されることはないというのが(善し悪しは別として)応用言語学を含む多くの国際学界の現実であり、この条件

が満たされていないために、特に人文社会科学系の日本人研究者による優れた研究の成果が欧米圏を含む諸外国であまり知られていないというケースがしばしばみられる。そういった状況を一歩でも改善するための一つのささやかな試みを、本シリーズを通じてはじめたいと思っている。

追記

前号(2005 年版)発行以降、李貞旼(2002 年版に論文を掲載)・朱桂栄(2004 年版に論文を掲載)の両氏がめでたく博士号を取得した。

李氏の論考を含む本論文集シリーズ 2002 年版はながらく版元品切れとなっていて諸方にご迷惑をおかけしていたが、大関浩美氏の協力を得てこのたび収録論文の多くをインターネット上に無料公開した。その他の号の目次や要旨などの情報も既に公開している。サイトのアドレスは以下のとおりである。今後も随時更新を進める予定であるので、折に触れてアクセスしていただきたい。

『第二言語習得・教育の研究最前線』
ホームページ
http://jsl2.li.ocha.ac.jp/saizensen/

謝辞

多忙をおして短期間の間に綿密な講評をお寄せくださった 11 名の査読協力者の先生方、企画編集上等の様々な助言をくださっている白井恭弘・徳永あかね・長友和彦の各氏に深く御礼申し上げる。編集事務局実行委員の徳田恵氏(本号に論文を掲載)には装丁企画・執筆者との連絡調整・書式点検・校正などの実務に御活躍いただいた。掲載が決まった投稿論文をフォトレディー版に成形する作業は当初、基本的にはそれぞれの執筆者の責任でおこなうこととなっていたが、実行委員には主として不統一箇所の点検や修正指示などを通じ、また時には「レスキューチーム」として執筆者をサポートしていただいた。前々号実行委員の向山陽子氏からも実務作業に関してさまざまな助言と技術指導・ノウハウ提供を含む御助力をいただいた。向山氏にはあわせて、経理・発送事務等の元締めとしてもこのプロジェクトを背後から支えていただいている。小林久美子・張瑜珊・矢高美智子の三氏には、発行作業にあたって御協力を仰いだ。また、本特集号を市販ルートに乗せるにあたって御協力いただいた凡人社と、今回も厳しいスケジュールの中、迅速に印刷製本作業を進めてくださった平河工業社にも感謝申し上げたい。なお、前号同様、本号の刊行も日本語習得・教育に関する研究のレビュー論文集編纂を目的とする長期プロジェクトの一環であり、このプロジェクトは 2005 年度から新たに更新された文部科学省科学研究費補助金の助成を受けている[2]。

注

1. 本号に収録した投稿論文は「動向報告」と「展望論文」の２つの範疇に分け、査読者にもこの類別を念頭においてそれぞれの基準で御審査いただいた。動向報告が「研究の流れや関連する概念・学説を的確に紹介することで新進研究者にとって資料的価値のある有益な文献」という基準を満たすものであるのに対し、展望論文はこれに加えて「未解決の研究課題に対する解答ないし解決策(または有力な手がかり)を新たに提案する、あるいは先行研究の論点を新しい角度からとらえ独自の再整理・総括をする、メタ分析によってこれまで知られていなかった全体像を描き出すなどのオリジナルな貢献が顕著にみられるもの」である。ただし、この区分は研究分野自体の学問的成熟度やレビューの範囲設定など様々な要因に左右されるので、個々の収録論文の絶対的な質や、ましてや執筆者個人の力量に関する格付けを意図したものでは毛頭ない点にご留意いただきたい。状況によっては最初から「動向報告」の枠内に筆先を絞って先行文献の徹底した記述的整理に徹するのも一つの妥当な執筆アプローチであり、むしろその時々でそういった柔軟な戦略決定ができることが研究者としての懐の広さを示すものであると考えられるからである。
2. 「第二言語としての日本語習得・教育に関する研究のレビュー」基盤研究(Ｃ)2005～2008 年度　課題番号 17520343　研究代表者　佐々木嘉則

参照文献

林美善 (2002)「電話会話における終結部研究の動向：日米・日韓を比較した研究を中心に」『第二言語習得・教育の最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学研究会 236-244.

佐々木嘉則 (編) (2005) 文部省科学研究費補助金研究成果報告書『第二言語としての日本語習得研究のレビュー論文集編纂と刊行・オンライン配信』

田中真理 (2003)「新刊紹介：『第二言語習得・教育の最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』」『第二言語としての日本語の習得研究』6, 116-118.

遠山千佳 (2005)「助詞「は」に関する第二言語習得研究の流れと展望」『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』日本言語文化学研究会 101-121.

谷内美智子 (2002)「第二言語としての語彙習得研究の概観：学習形態・方略の観点から」『第二言語習得・教育の最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学研究会 155-169.
谷内美智子 (2003)「付随的語彙学習に関する研究の概観」『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』日本言語文化学研究会 78-95.
吉澤真由美 (2004)「L2 読解における incidental vocabulary learning：教育的支援に関する研究の概観と今後の課題」『第二言語習得・教育の研究最前線 2004 年版』日本言語文化学研究会 88-108.

ささき　よしのり／お茶の水女子大学